木田市長の ど～んとコミュニケーション

真珠のように輝く
まちづくりのために

vol.40

式典を盛り上げた天気に感謝

天気は、なかなかわたしたちの思ったとおりにはいきません。

今年の市民大運動会は、雨天により市民体育館で行わなければならなくなりました。

そんな中、11月7日に行われた御木本幸吉生誕１５０周年記念式典は、運動会とは逆に素晴らしい演出効果の天気に恵まれました。

式典は、素晴らしい青空の下で行われました

朝のうちは雨が降っていて、午前11時の式典までに雨が上るのか心配させられました。今回の式典では、御木本幸吉の銅像の前で、雨天ではほぼ不可能な「矢部澄翔さんによる書のパフォーマンス」や「桂三枝師匠と中村幸昭名誉会頭のトークショー」も予定されていました。

ところが、式典の開始が近づくにつれ、空がだんだんと明るくなってきて、次第に青空が見えるようになり、午前11時には日が差し、素晴らしい青空となりました。

わたしはあいさつの中で思わず、「まるで神様がこの式典に合わせて、雨と雲の幕をサーッと開けてくれたかのようです」と言ってしまいました。

心配のない天気の中で、無事開催されるのも結構なことです。しかし今回のように、みんなが心配している中で、式典の開始に合わせたかのように劇的に好転するという演出にはかないません。

もちろん計画してできるものではありません。参加された数百人のかたがたの安どの表情を感じたとき、記念式典を真珠島の屋外で開催して本当に良かったと感じました。

鳥羽市出身の人で、御木本幸吉ほど外国で有名な人はいません。今後もそうは出ないでしょう。

「養殖真珠の発明」がもたらした恩恵は計り知れません。真珠の販売など、直接真珠に関係する人をはじめ、多くの観光関係者のかたがた、さらには真珠を買って身に付けるかたがたまで含め、多くの人間に恵みを与えてくれました。

わたしたち鳥羽市民は、御木本幸吉に学び、感謝し、市内外に向けて大いに情報発信をしていかなければならないと思います。

御木本幸吉によって開かれた新しい豊かな社会を示すような式典の天気でありました。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.79

いのちのバトンタッチ

青木新門（しんもん）さんの「いのちのバトンタッチ」というエッセイを紹介します。

青木さんは、昭和21年に満州（現在の中国東北部）から引き揚げ、執筆活動を続けながら、葬儀会社に勤められ、親族のかたに成り代わって死体をお棺に納める納棺の仕事をするようになり、やがて世間からは「納棺夫」（青木さんの造語）と呼ばれるようになっていたそうです。

以下はエッセイからの抜粋です。

葬式の現場に長く関わっていますと、憎しみや怒りが渦巻くとげとげしい家と悲しみの中にも和気が漂っている家があることに気づきました。最初、あの和気はどこから来るのだろうかと不思議に思いました。やがて悲しみの中にも和気が漂っている家に共通しているのは、肉親が臨終の場に立ち会っておられた家であることを知りました。

ところが現代社会は、そうした場をなくしてしまいました。核家族化のせいもあるでしょうし、仕事の関係もありましょう。また医療機関の生命至上主義が臨終の場を親族に提供しないということもあるでしょう。そのことが当たり前のようになり、死に顔など見せるものでも見るものでもないという風潮がまかり通っています。

死の真実は死の現場でしか知ることができないのです。わたしが死の現場で学んだことは「いのちのバトンタッチ」の大切さでした。

死に臨んで先に往く人が「ありがとう」といえば、残る人が「ありがとう」と応える、そんなバトンタッチがあるのです。